



若き日の白蓮 (ウキペディアより)

先頃のNHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」で、主人公の友人のモデルとなった歌人柳原白蓮(一八八五〜一九六七)は、本郡とも関わりが深い。

白蓮は本名燐子。伯爵柳原前光の二女として出生。若くして遠縁の北小路資武と結婚し離婚。明治四十四年、九州の炭鉱王伊藤伝右

柳原白蓮と飯田下伊那 上

鎌倉貞男

の概略が記されている。

それによると、白蓮は昭和二十八年(原文は二十七年と誤記)七月一日から八日までの約一週間本郡に滞在し、先に述べた講演活動を行

けた。歌集『踏絵』『流転』の他、著書も多い。

白蓮と本郡との関わりは、竜丘公民館発行の『丘の語部たち―古老の語る竜丘』(昭和五十六年発行)中の「歌人柳原白蓮女史・邦子夫人を迎えて」(塚平義郎記)に、そ

っている。その時、高木正得子爵夫人で三笠宮妃の母である高木邦子が同行した。

この時、仲介の労をとったのが先の塚平義郎である。氏は、終戦直後、国民の思想が荒廃したことを憂え、何か文化的な活動をしたいと考え、二人を知り、岐阜市の知人酒井正夫と図って白蓮を招聘した。

この計画は多くの賛同を得て、氏の地元である旧竜丘村をはじめ、旧千代村、旧龍江村、旧川路村、旧三穂村、旧平岡村、泰草村、飯田市等で講演が行われたようである。講演の演題は、「母の愛情」「歌を通じて世界平和を祈念する」

等であった。いずれも各地区村長、公民館長、婦人会長、地区新聞社等の協力を得て、成功裡に終了したらしい。

以下、文献や記録を基に可能な限りその足跡を追ってみたい。昭和二十八年七月四日、白蓮は飯田病院の土田耕平(一八九五〜一九四〇)歌碑を訪れている。

飯田下伊那歌人連盟発行の機関誌『ぬかご』14号(昭和五十年発行)は、アララギの鬼才と言われた土田耕平の特集号である。そこへ村沢武夫が「土田耕平の歌碑と歿後」と題した一文を寄せている。

日に病院の庭に建てられた(但し、除幕式は、木下右治編『飯田下伊那アララギヒムロ史』に見る通り、同月十二日である)。

それより以前、たまに白蓮の来峽を知り、関係者が女史に請い、碑のかたわらに杉の若木を植えてもらった。その故は、耕平の歌集『若杉』にちなんでの由である。

植樹後、白蓮は次の一首を詠じ、原家の画帖に記して去ったという。のちの日のおもひ(い)でをここに植ゑ(え)てきぬ 栄の家の君のためとて 白蓮は竹柏会所属の佐々木信綱門下であるから、島木赤彦に師事

したアララギの歌人耕平とは、特に交流はなかったと思われるが、同じ歌人として依頼に応じたのであろう。

郷土紙「南信時事」

(7月2日発行)や、歌集『伊那(続伊那歌道史)』(昭和四十八年発行)に記されている通り、その日の夜六時半から飯田市箕瀬の久井旅館において、両女史を囲んだ座談会が開催された。右新聞の案内によれば、会費は百円で、夕食の用意もあり、即席揮毫の頒布もされたようである。

(故人敬称略)